

# 民族共同体の祭典

——ナチ党大会の演出と現実について——

田 野 大 輔

## 1 はじめに

ヒトラーの権力掌握から戦争突入までの間、毎年9月にほぼ1週間にわたってニュルンベルクで開催された「ナチ党帝国党大会 Die Reichsparteitage der NSDAP.」は、第三帝国期のもっとも重要な公的行事であり、ナチズムに関するイメージ形成に決定的な役割をはたしてきた。そこで展開された大衆集会や隊列行進は、レニ・リーフェンシュタール監督の映画『意志の勝利』の影響もあって、いまなおナチズムの圧倒的な大衆動員力を示すものと考えられている。だがそのために党大会の実像がつかみにくくなっていることも否定できない。党大会がナチズムの自己理解において中心的な位置を占めたことはたしかであるが、その大衆効果を自明視することはナチ党の宣伝を鵜呑みにすることに等しい。

研究史をふりかえてみても、党大会を全体的または部分的に扱った研究は無数に存在するが、その多くはこうした一面的なイメージにとらわれすぎているように思われる。たとえば、党大会をはじめて包括的に論じたハミルトン・T・バーデン [Burden 1967] は、ほとんど新聞記事のみに依拠して大会を再構成しているため、党の宣伝を無批判に踏襲する結果に終わっているし、クラウス・フォンドウンク [1988] やジョージ・L・モッセ [1994] など、ナチズムを「政治的宗教」ととらえる一連の研究者も、党大会における祭儀の影響力を暗黙のうちに前提としてしまっている。これにたいして、党大会を多角的に考察したジークフリート・ツェルンヘファー [Zelnhefer 1991] は、もう少しアンビヴァレントな実像を明らかにしており、この祭典が必ずしも国民に熱狂をもって迎えられたわけではないことを指摘している。

党大会の大衆効果を限定的なものとする視点は、基本的に80年代以降の日常史研究の延長線上にあるといってよい。その代表者の1人であるデートレフ・ポイカートに

よれば、党大会のような「露骨に政治的な式典」は「ほぼありとあらゆる様式や技術をあちこちから寄せ集め、独創性を欠くごった煮にしたもの」[ポイカート 1991：293]であり、あまり魅力的なものではなかったため、1935年頃から後退していったという。こうした評価があることを考えれば、党大会の影響力を自明視することはできないだろう。とはいえ、参加者だけで毎年50万人近くに達し、ラジオや映画を通じて国民的規模で体験された点からしても、この祭典をまったく効果のないものと片づけるわけにもいかない。問われるべきは、党大会の舞台と舞台裏の関係であり、そこで提示された理想と現実の関係である。熱狂をもって迎えられなかったにせよ、党大会は国民に何らかの統合力を及ぼさなかったのか。もし及ぼしたとするならば、その力はどのように作用したのか。

こうした観点から、本稿では党大会の演出をナチ体制下の現実と関連づけることによって、ナチズムの大衆動員のメカニズムを解明することにした。考察の焦点は、ナチ・イデオロギーの核をなす「民族共同体」の理念が党大会でどのように提示されたのか、そしてそれがナチ体制下の政治的・社会的現実とどんな関係にあったのかという点におかれる。というのも、党大会の演出を細部にわたって検討したところで、これを「民族共同体」の問題から切り離して論じるかぎり、ほとんど意味がないと思われるからである。もちろん、以下の考察もこれまでのナチズム研究の蓄積、とくにツェルンヘファーの研究に多くを負っているが、演出と現実の関係に注目して分析をおこなうことで、党大会についても新たな知見が得られるだろう。少なくともそれは、ナチズムの大衆動員力を「魔術と操作」[フォンドゥンク 1988]に還元するような視点を克服するための一助となるはずである。

## 2 民族共同体の理念と現実

1933年の党大会で、ヒトラーは突撃隊と親衛隊にむかって次のように演説している。

「われわれの運動の党大会はつねに男たちの、民族共同体の規律を単に理論的に代表するだけでなく、実際にも実現することを決意した男たちの、偉大な観閲式だった。それは生まれも、身分も、職業も、財産も、教養も考慮しない共同体だった」[Domarus 1973：298]。

党大会の会場で一糸乱れぬパフォーマンスをくりひろげる男たちは、ナチズムが追いもとめた「民族共同体」の一体性を具現していた。この「ナチ党とナチ国家の大規模なショー」[Domarus 1973: 732]は、「民族共同体」を上演するための舞台にほかならなかったのである。党大会の分析に入る前に、まずこの「民族共同体」の理念と現実の関係について、既存研究を整理しながら大まかな見取り図を描いておきたい<sup>1)</sup>。

「民族共同体 Volksgemeinschaft」とは、ごく簡単にいえば、階級対立のない結束した社会を意味する理念である。「民族共同体は、その民族それじたいに関係する問題のすべてにわたって民族を統一するところに成立する」[ヒトラー 1973 上: 483]と、ヒトラーはすでに『わが闘争』のなかで述べている。曖昧な定義であるが、ともかくそれは国民全体を包括する統一的な社会をめざすものだったといえるだろう。1933年1月のナチ政権成立直後、ヒトラーは国民にむけた最初のラジオ演説で、「わが政府は階級や身分を克服し、わが国民をしてみずからの民族的・政治的統一性とそこから生ずる義務とを意識させるであろう」[Domarus 1973: 192]と語っている。ヴァイマル共和国においては諸勢力が対立していたのにたいし、彼はあらゆる階級対立の解消と国民的連帯の創出を約束して登場した。ナチ党機関紙『フェルクキッシャー・ベオバハター』が書いているように、「新しい民族共同体の建設」[フェスト 1975 下: 36]こそ、ナチズムの政治目標だったのである。そしてこの「民族共同体」を実現するための手段が、いわゆる「強制的同質化 Gleichschaltung」であった。国家・社会のトータルな画一化をめざして実行された「強制的同質化」の過程は、州や地方自治体の解体にはじまり、非ナチ政党の解散や自律的な政治・経済組織および労働組合の破壊・再編成をへて、わずか10ヵ月あまりで完了する。かくしてヒトラーは翌年9月の党大会で、ナチ革命の終了と第三帝国の千年支配を宣言することになる。「今後千年にわたり、ドイツには2度と新しい革命はおこらないであろう」[Domarus 1973: 448]。

だがこうした声明にもかかわらず、真の統一は実現しなかった。そのかわりに出現したのは、「民族共同体」の表看板とは裏腹の、諸勢力が衝突しあう無秩序な社会だった。近年のナチズム研究がほぼ一致して認めるところによれば、第三帝国はけっして一枚岩だったわけではなく、むしろ激しい権力闘争にひき裂かれた「機構的アナーキー」[Mommsen 1971: 713]というべきものだった<sup>2)</sup>。ペーター・ヒュッテンベルガ

1) なお本節の内容は、既発表の拙稿[田野 1995]を要約・修正したものである。

2) 第三帝国の内部構造については、これを諸勢力が争いあう修羅場と見るマルティン・

一によれば、「強制的同質化」も不徹底に終わった[Hüttenberger 1981]。たしかに左翼政党や労働組合は破壊されたが、それ以外の大部分の既成集団、とくに官僚機構・軍部・企業などは、ナチ党の侵入にほとんど見舞われることなく、自由裁量を維持した。これらの組織・集団は、名目上は「強制的同質化」されたものの、多くの場合はナチ党员による指導的地位の引き継ぎがおこなわれたにすぎず、その後も党指導部や政府各部署にたいしてロビー活動をおこなうなど、圧力団体として機能しつづけた。「民族共同体」というファサードの背後では、ヴァイマル期以来の社会的対立がくすぶりつづけ、まさに「多頭制」的な権力構造が現出したのだった。そのため、ナチ政権成立後しばらくすると、「民族共同体」の到来という約束がはたされたなかったことが誰の目にも明らかとなった。亡命社会民主党の『ドイツ通信』[Behnken 1980]は、人々がたえずナチ政権への不満や批判を口にしてきた事実を明らかにしている。

もっとも、第三帝国がアナーキーな権力構造の上に成り立っていたという認識じたいは現在ではほとんど常識化しているから、われわれの課題は、そうした無秩序な現実と「民族共同体」の理念との関係を明らかにすることだろう。両者の乖離を指摘するにとどまるとすれば、「民族共同体」の理念は単なる欺瞞ないしは道化芝居にすぎないということになり、研究対象に値するものではなくなってしまう。ナチズムが「民族共同体」の実現に精力を注いだことは疑いなく、そうであるからには、この理念そのものにみずからの実現を阻むメカニズムが組み込まれていたと考えなければならぬ。

まず指摘できるのは、「民族共同体」の理念の曖昧さである。それは何らかの統一的な社会を志向していたが、一貫した政策やプログラムに発展することはなく、漠然としたユートピア的な目標にとどまったのである。そこには明らかに戦術的考慮が働いていた。目標を明確にしまうと、潜在的な支持者が失われるだけでなく、異議を唱える者がでてくる可能性もあったからである。そのため、ナチ世界観指導者アルフレート・ローゼンベルクの公式のコメンタールにもかかわらず、教義の確立は妨げられた。ゲッベルスはこのことを臆面もなく認めている。「ナチズムは個別の事柄や問

---

プロシャートやハンス・モムゼンらの「機能主義」的な解釈が支配的となっている。ペーター・ヒュッテンベルガーは、こうした権力構造を「多頭制 Polykratie」と呼び、「特定の条件のもとでたがいに闘争しうる、多数のかなり自律的な支配の担い手」[Hüttenberger 1976: 420]と定義している。

題を検討してきたのであって、その意味で1つの教義をもったことはない……人は各々欲するところのものを表象すればよい」[フライ 1987:190]。

「民族共同体」の理念もまた、個々人の社会的動機に応じて多様に表象することが可能な一種の行動指針にすぎなかった。それゆえ、これをどう表象すべきかをめぐって党内で激しい対立が生じることになった。党の指導者たちはそれぞれ「民族共同体」を表象したが、それらの表象はたがいに矛盾していた<sup>3)</sup>。こうした矛盾によって「民族共同体」の理念が有名無実化してしまうことを避けるには、反ユダヤ主義、反ポリシェヴィズムといったかたちで、たえず外部の敵を示し、「民族共同体」の範囲を否定的に設定しなければならなかった。かくして「闘争」が至上命令となった。『わが闘争』の著者が述べるように、「民族共同体」の建設は「自分の目標にたいして積極的な闘争を指導してゆくこととならんで、この目標の敵対者を絶滅させる場合にのみ成功できる」のであり、そのためには「とにかく追求しようと思った目標にむかって容赦のない態度、熱狂的に一方的な態度をとること」[ヒトラー 1973 上:480-1]が必要だった。「運動の強さ、したがってまたその存続資格は、一般に運動が闘争の原則を自己が発達するための前提と承認するかぎりにおいてのみ、増大をつづけることができる」[ヒトラー 1973 上:498]と考えられたからである。敵にたいする容赦のない攻撃のなかではじめて、「民族共同体」は輪郭をあらわしたのだった。

だがここで注意しておく必要があるのは、この闘争が外部にたいしてだけでなく、内部においても展開されたことである。「労働の闘い」「生産の闘い」など、様々なキャンペーンが闘争の様相を呈しただけでなく、突撃隊員は「政治的兵士」、労働者は「労働の兵士」とされ、「ドイツ労働戦線」「ドイツ文化闘争同盟」といった攻撃的な名称の組織も数多く設立された。こうしたことはたしかに軍事的動員の強化を示すものだったが、「闘争」にはさらに別の社会的意味もあった。ヒトラーによれば、ナチズムは「貴族主義的原理によって、最良の人物にその民族の指導と最高の影響力を確保するようにしなければならない」[ヒトラー 1973 下:108]のであって、その選抜は「何

---

3) 法務大臣ハンス・フランクが回想録に書いているように、「ナチズムとはすなわち何某なる者が語り、あるいはおこなっていること以外の何ものでもない……ヒトラー、ゲーリング、シュトラッサー、レーム、ゲッベルス、ヘス、ローゼンベルク、その他。基本的には指導的人物の数と同じだけのナチズムがあったのである」[シェーンボウム 1978:69]。

よりも峻厳な生存闘争じたいがおこなう」[ヒトラー 1973 下：113] とされた。つまり「闘争」は、すぐれた指導者を選抜するためのふるいでもあった。ティモシー・メイソンが指摘するように、ナチ的な意味での「闘争」は、世界観上の敵との殲滅戦争としてだけでなく、昇進と利益をめざす個々人の生存競争、すなわち社会的モビリティというかたちでもあらわれたのである [Mason 1981：39]。

ナチ党の政治的リーダーシップを特徴づけた「指導者原理 Führerprinzip」は、こうした社会ダーウィン主義的な「闘争」の理念に根ざすものであり、それは「人生の苛酷な現実がたえずおこなう永続的な選抜によって、多年の間にこの原理の遂行に必要な指導者の人材を獲得したときにのみ、いきいきとしたものになる」[ヒトラー 1973 下：314-5] と考えられた。もちろん、「全指導者の権威は下へ、そして責任は上へ」[ヒトラー 1973 下：117] という言葉に示されるとおり、いったん選抜された指導者は権威主義的に統治をおこなうとされた。「民族共同体」の理念にもそうした志向が存在したことは、次のヒトラーの発言からも明らかである。

「民族共同体という組織それじたいは、そういう人間を大衆の上におき、したがって大衆をそういう人々の下に従属させようとする努力の具体化したものでなければならぬ」[ヒトラー 1973 下：112]。

だが「民族共同体」の理念にこうした垂直的志向があったとすれば、それはこの理念の本質をなす水平的志向と矛盾した。前者が「民族共同体」の成員に優劣を見いだすのにたいし、後者はその同質性を要求するものだからである。このディレンマは、『わが闘争』におけるヒトラーの次のような主張にも反映している。

「一般にその人種的所属によっていろいろ評価しなければならないと同時にまた、ある民族社会のなかにおいても、個々の人間について様々な評価がされなければならない。ある民族がみな同一でないと確認することは……さらにある民族共同体のなかの個々の人間にもあてはまるのである」[ヒトラー 1973 下：107]。

第三帝国下の公法学者たちも、このディレンマの解決に頭を痛めていた。たとえばカール・シュミットは、民族の同質性と指導者原理を結びつけることで、その解決を



試みている。

「総統と従者との永続的で確実な接触と相互の信頼は、両者の同質性にもとづいている……したがって、統一的なドイツ民族の同質性が、ドイツ民族の政治的指導の概念にとって絶対的な前提と基礎である」[Michalka 1993: 34]。

だがこれも根本的な解決ではなく、曖昧な言葉で問題をぼかしただけだった。そもそも「指導者原理」じたいが、「民族共同体」の実現を阻害する要因となっていた。この原理は、ヒトラーを頂点とする一元的な権力機構の確立をめざすものであるかに見えて、実際には指導者間の対立を助長し、権力機構を解体する方向に作用したからである。「指導者はずねに上から任命され、同時に無制限の全権と権威を与えられる」[ヒトラー 1973 上: 489] とヒトラーが述べているように、それは「総統」への絶対的服従を要求しつつも、彼の権威に抵触しないかぎり、各レベルの指導者に無制限の自由裁量を与えるものだった。各指導者の権限範囲はしばしば重複していたため、対立は熾烈をきわめた。ラインハルト・ボルムスがいうように、この権力ゲームを貫いていた原理は「征服者の権利」「篡奪者の権利」であり、ここでは「官職のダーウィニズム」[Bollmus 1970: 245] と呼ぶべき生存競争と自然淘汰が実践原則となり、勝利をおさめた人物がそのことによってすぐれた指導者たることを証明したのである。

しかもまた、「指導者原理」が多数決原理を否定し、内部対立を調停する制度を事実上廃棄したことが、混乱に拍車をかけた。そもそも「民族共同体」の理念があらゆる対立の存在を否定し、原理的に利害の多様性を認めていなかったため、正式な協議機関を通じて利害を調整することはできず、たえず表面下で衝突がくり返される結果とならざるをえなかった。それに加えて、「闘争」の理念が「容赦のない態度」を要求したことで、妥協の可能性そのものが閉ざされていた。運動の強さは「支持者がその運動をそれだけ正しいものであると主張し、同じような性質をもった他の組織にたいして最後まで貫き通す際の熱狂、いや不寛容さによって左右される」[ヒトラー 1973 上: 497] とされた以上、妥協とは弱さを示すものにほかならなかったからである。

こうした激しい対立を調停しえたのはヒトラーだけであり、そのことが最高審判者としての彼の権威を高めることになった。ヒュッテンベルガーの表現を借りれば、たがいに競いあう指導者たちは「ヒトラーを象徴的な人物に仕立て上げなければならな

かった」[Hüttenberger 1976 : 431] のであり、彼らの熾烈なライバル争いが結果的に「総統の意志」を絶対的な規範へと押し上げたのである。当時の国民世論においても、ヒトラーの人気はきわめて高く、体制内の対立を超越した存在として、批判の対象から除外されていた<sup>4)</sup>。とはいえ、彼の調停も一時的な休戦協定にすぎないことが多く、対立が根本的に解消されることはなかった。それどころか、ヒトラーの権威が絶対化されたために、彼の支持をめぐる争いはさらに激しさを増すことになった。その意味では、「総統の意志」なるものも、実際には根深い権力闘争の隠れ蓑にほかならなかったといえよう。ここにはある種の循環が成立していたのであり、抗争が激化すればするほど、これを調停しうるヒトラーの権威が高まる一方、逆にそのことがますます抗争を激化させたのだった。

この抗争で勝利をおさめるために、個々の指導者は各領域で「総統の意志」を楯にして権力を行使し、「民族共同体」の理念を具体化していった。親衛隊指導者ハインリヒ・ヒムラーが「東方大帝国」という人種主義的ユートピアを夢想し、農業大臣リヒャルト・ヴァルター・ダレが「血と土の新しい貴族」の出現を期待した一方で、内務大臣ヴィルヘルム・フリックは権威主義的な「官僚国家」の構築に努め、ローベルト・ライのドイツ労働戦線は「労働の貴族」の「業績共同体」というヴィジョンを練り上げていた。これらの忠臣たちにとっては、ヒトラーの正規の命令は不要だった。彼らは漠然とした言葉で述べられた「総統の意志」から命令を引きだし、それぞれのイニシアティブでこれを実践に移していったからである<sup>5)</sup>。目標は漠然としていたが、それを「闘争」が埋めあわせた。内外の敵への攻撃で体験される高揚感が、「民族共同体」の理念をいきいきとした意味でみたくれたのである。この高揚感を維持するためには、たえず政治的な目標設定を過激な方向へエスカレートさせ、運動の行動主義的エネルギーを活性化しつづけなければならなかった。かくして熾烈な闘争が恒久化し、その攻撃性は急進化の度合いを強めながら、社会全体を解体してゆくことにな

4) 『ドイツ通信』は次のように伝えている。「見逃せないのは、多くの者が文句をつけ、こぼしていても、あいかわらずアドルフ・ヒトラーの力と誠実な意欲を信じていることだ」[Behnken 1980 Bd.1 : 10]。

5) この点についてプロシャートは、「総統の意志」が具体的な命令というよりはむしろ、シンボリックなものにすぎなかったと指摘している [Broszat 1970 : 408]。「東方生存圏」の獲得といった目標でさえ、たえざる政治的動員のイデオロギー的メタファーであったという。



った。

とはいえ、個々の指導者が真剣に「民族共同体」の実現をめざしていたことに疑問の余地はない。むしろ彼らの構想は、それに内在する矛盾によって挫折したというべきだろう。その矛盾とは、結束した共同体を実現するために、この共同体のなかで闘争しなければならないと考えたことである。実際問題として、たがいの結束をめざしてたがいに争うなどということは、円を四角にしようとするに等しかった。そこでは「民族共同体」を実現しようとするほど、そのための闘争はいつそう熾烈なものとなり、「民族共同体」の実現はますます阻害されることになった。ナチズムの政治的レトリックは、たえずそれ自身の足下をほりくずしていたのである。

しかしながら、「民族共同体」の到来という約束がはたされることはなかったとはいえ、そのイメージが社会意識の上である種のリアリティを獲得した可能性は十分に考えられる。各種の党組織が数百万の人々を吸収し、彼らに地位と職務を与えたことだけでも、「民族共同体」への期待をつなぎとめたはずだし、これらの組織が一部の人々に社会的上昇の可能性を提供したことは、「民族共同体」を実感させる象徴的な効果を及ぼしたに違いない。能力のある者に出世の道を開くというナチズムの政策は、とくに新中間層の上昇志向に適合しており、労働者のなかにもこれに応じた者がかなりいた。事実、1933年から39年までの6年間に社会的に上昇した者の数は、ヴァイマル期の最後の6年間とくらべて倍増し、党や国家機関には労働者が100万人も吸収されていた [グルンベルガー 2000 : 68]。ヒトラーは1937年に次のように豪語している。

「われわれの最大の誇りは、この国においてわれわれがすべての有能な個人——その生まれのいかんを問わず——にたいして、有能で、ダイナミックで、勤勉で、果敢でさえあれば、最高の地位にまでのぼれる道を開いたことである」 [Domarus 1973 : 702]。

ナチズムは古い社会秩序を全面的に覆すことはなかったものの、少なくともそこに風穴をあけることには成功した。体制内の激しい抗争も、個々人にとっては漁夫の利を得て栄達をはかるチャンスになった。そもそもヒトラー自身が下層階級から身をおこした指導者であり、たえず催された大衆集会や隊列行進も、社会的上昇の期待を盛り上げる役割をはたした。ポイカートによれば、「式典やナチ大衆集会の催し、とくに

『総統』の登場のときに、支持者たちは彼らが意義と称するものを確かめることができた……それが安心感、意味の充実、上昇への期待と結びついた」[ポイカート 1991 : 101]。したがって、「民族共同体」の構想が挫折したにもかかわらず、結果として社会的モビリティが増大し、第三帝国下の社会は以前よりも風通しのよい、ダイナミックな社会として人々の目に映るようになったのではないかと推察される。

もっともこの点については、「民族共同体」がナチズムによってどう演出され、人々がこれにどう反応したのかを、さらにほり下げて考察する必要があるだろう。こうした観点から、次に党大会を取り上げ、そこで演出された「民族共同体」がナチ体制下の政治的・社会的現実といかなる関係にあったのかについて、具体的に検討していくことにしたい。

### 3 運動の祭典

1933年の党大会の開会演説で、ヒトラーは大会の意義を次のように説明している。

「ナチ党大会の意義とは、1. 運動の指導者に党指導部全体とふたたび個人的な関係を築く機会を与え、2. 党同志をあらためてその指導部と結びつけ、3. みなともに勝利の確信を強め、4. 闘争の続行のために大きな精神的・心理的刺激を与えることであった」[Nürnberg 1933 : 13]。

この説明から、党大会の目的がとりわけ次の点にあったことが確認できるだろう。すなわち、黨員に「勝利の確信」を植えつけ、彼らをふたたび「運動の指導者」と結びつけることである。同じ演説でヒトラーが述べるように、「この教化において心理的にもっとも効果的な手段は……偉大で強力な運動への参加を目に見えるように実演すること」であり、「したがって、われわれの大集会は新たな支持者の獲得だけでなく、とりわけすでに獲得された人々の固定化と道徳的強化に役立ったのである」[Nürnberg 1933 : 12]。

党大会が何よりも党組織の問題だったことは、大会の運営を党の帝国組織指導部が担ったことに示されている。この部局は帝国組織指導者でドイツ労働戦線指導者のローベルト・ライのもと、「帝国党大会の組織的な準備と開催」[Der Reichsorganisationsleiter 1936 : 172] に独占的な権限をもち、ライの代理で帝国総監のルドルフ・シュメ

アが組織本部で実務を取り仕切った。もっとも党最大の行事なので、重要な決定はヒトラー自身が下したし、運営にあたっては党のトップで総統代理のルドルフ・ヘスや、ニュルンベルク市当局の協力も必要だった。会場の設営に関しては、アルベルト・シュペーアが責任者となり、ニュルンベルク党大会目的連合が施設の計画と建設を担った。さらに宣伝大臣で帝国宣伝指導者のヨーゼフ・ゲッベルスや、フランケン大管区指導者のユリウス・シュトライヒャーといった党の領袖も、それぞれ関係する範囲で干渉したため、党大会の運営はきわめて錯綜した様相を呈することになった。

大会のプログラムも、党組織の構造を反映したものとなっていた<sup>6)</sup>。1日目をヒトラー到着の日、2日目を党会議の日とすれば、3日目は労働奉仕団に、4日目は党政治組織指導者に、5日目はヒトラー・ユージェントに、6日目は突撃隊と親衛隊に、7日目は国防軍に、それぞれ割り当てられた。1937年以降は4日目にマスゲームや競技をおこなう「共同体の日」が挿入され、大会期間も8日間に延長されたが、基本的なプログラムに変更はなかった。しかもまた、各組織にはきまった集会場が指定され、ルイトポルト競技場は突撃隊と親衛隊に、ツェッペリン広場は党政治組織指導者と労働奉仕団に、スタジアムはヒトラー・ユージェントに、それぞれ割り当てられた。どの組織も別個に集会をおこない、全体が一同に会することはなかったのであり、そこには「独立王国」の寄せ集めともいふべき党組織の性格が反映していたといえよう。これらを束ねる役割をはたしたのが、あらゆる大集会で演壇に立った「総統」であり、彼に忠誠を誓うことではじめて、各組織は「民族共同体」の一翼を担うことができたのである。この関連で注目されるのは、党大会がしばしばヒトラーに党内対立を調停する機会を与えたことである。たとえば1934年の大会における彼の文化演説は、ゲッベルスとローゼンベルクの調停をはかるものだった。もっともこれによって両者の対立はむしろ激化したから、カリスマと派閥主義が規定しあうという第三帝国の権力構造は、党大会にもあらわれていたといえることができる。

党大会の主役はもちろん「総統」であり、大会がたえず彼を中心に展開したことはいうまでもない。リーフェンシュタールの『意志の勝利』にいたっては、ヒトラーの登場シーンが映画全体の約3分の1に達し、彼の演説は音声全体の5分の1、演説全体の3分の2以上を占めていた[Zelnhefer 1991: 241]。大集会はつねに「総統」の登

6) 党大会のプログラムに関しては、1933年から38年までの公式報告を参照。

場で最高潮に達したが、彼の声聞き、彼の姿を見たという体験が大きな感動をもたらした。1937年の大会でヒトラーの演説を聞いたある党員は、その感動をこう記している。

「最近のすべての年月を通して、私はこの声を耳にするとき、いつも同じことを体験してきた。1933年以前の政治闘争のなかであれ、ジューゼン工場での演説であれ、ザール地方の解放とドイツ復帰のそれであれ、いままた労働の帝国党大会のそれであれ。いつでも私は、この声によって直接に自分が呼びかけられているのを感じた。この私に、無名の間人であり、6600万のなかのこの1人にむかって、この声は、問われているのは私なのだ、私がかわること、私が新しくなること、私がドイツ人になることが必要なのだと語りかける……この声を聞くたびに、私はそれにむかってこういいたい。私はここにいます、私を取り上げてください、私の力、私の能力、私の意欲、ことごとくをあなたの偉大な目的のために投げだしますと」[宮田 1991：242]。

この手記には、「総統」が聴衆にとってどんな意味をもっていたのかが示されている。重要なのは、ここでは彼との出会いが個人的な体験として受け取られていることである。ポイカートがいうように、「総統を見たのはほんの一瞬にすぎず、はるかかなたから垣間見たにすぎなかったとしても、彼との出会いはつねに鮮やかで、まったく自分だけにかかわる出来事として説明された」[ポイカート 1991：48-9]。党員たちは、この体験によって運動の意義を、そして運動の一員としての自分自身の意義を確かめたのである。それゆえ、数十万の群衆のなかに埋没していても、ヒトラーとの一体感によって自分が中心にいると感ずることができた。党大会の意義の1つは、ヒトラーを間近に見る機会を提供することで、彼と参加者の間にこうした「個人的な関係」を築くことにあった。

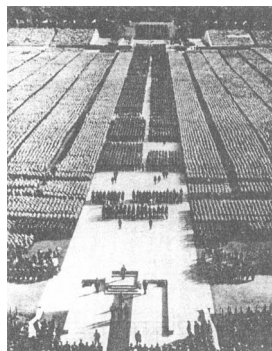
会場の設営したい、ヒトラーと大衆の関係を表現していた。ルイトポルト競技場であれ、ツェッペリン広場であれ、大衆集會が舉行される会場には必ず「総統」の立つ場所があり、正面スタンドの中央に一段高く設定された彼の演壇が会場全体の焦点をなしていた。ヒトラーはつねに壇上から群衆を見下ろしていたのであり、両者はたしかに垂直の関係にあった。党大会を扱った多くの研究者が述べるように、演壇の高さ

はヒトラーの権力を象徴しており、「総統は命じ、われわれは従う」という「指導者原理」の権威主義的秩序をあらわしていた。だが会場の設営に垂直性のみを見いだすのは、やはり片手落ちというべきだろう。というのも、高さを強調するだけなら、宮殿のバルコニーのような隔絶された場所に立つ方がはるかに効果的だからである。ヒトラーはむしろ現代のロック・スターと同様に、ステージの上で群衆とじかにむきあっていたのであり、ペーター・スローターダイクが指摘するように、彼はまさに「水平的理想化」[スローターダイク 2001: 24]によって作りだされた偶像だった。何十万もの人間を収容するこの広大な会場は、全体としてフラットな印象を与え、四方を取り囲む石造のスタンドも、基本的に水平性を強調していた。また正面スタンドには演壇よりも高い位置に貴賓席が設置されていたから、演壇の高さも絶対的なものとはいえなかった<sup>7)</sup>。さらに『意志の勝利』の観客は、正面の巨大な党旗のポールを上下するカメラを通して、ヒトラーよりもはるかに高い位置から会場を俯瞰することができた。その映像には、会場の構成原理がはっきりと示されている(図版1)。ルイトポルト競技場の中央に広い通路があげられ、その両側に数十万人の突撃隊員と親衛隊員が整列するなかで、「総統の通り」と呼ばれたこの通路の一端にヒトラーの立つ演壇が、もう一端に彼が2人の部下を従えて献花をささげる霊廟が設定され、これを軸にシンメトリーが成立していた。「総統」はその支点到位置する重要な構成要素として、全体のなかに統合されていたのであり、1人超然と立っていたわけではなかった。1934年の大会の閉会式で総統代理ヘスが述べた「党はヒトラーであり、ヒトラーはしかしドイツである。ドイツがヒトラーであるように！」という有名な言葉も、こうした文脈で理解する必要があるだろう。会場を埋めつくす党員たちは、ヒトラーを核に結束することで、ドイツの一体性を具現したのだった。ヒトラーは1936年の大会で、自分と大衆の神秘的な一体化を口にして、「何百万人のなかから……諸君が私を見いだしたこと、これぞ現代の奇跡！ 私が諸君を見いだしたこと、これぞドイツの幸福！」[*Der Parteitag der Ehre* 1936: 246]。

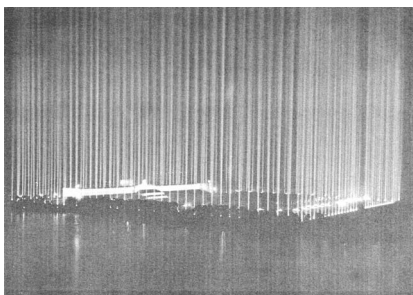
スローターダイクがいうように、こうした総統と大衆の融合は、大衆が主体として

---

7) もっともシュペーアは、ツェペリン広場の正面スタンドを設計する際に、貴賓席をあまり重視しなかったと証言している。「ただなくてはならぬ貴賓席がじゃまになって、私はこれをできるだけ目立たないように階段席の中央に配置しようと試みた」[シュペーア 1970: 66]。



図版1 映画『意志の勝利』より



図版2 「光のドーム」

の自己意識を獲得するための一段階と見ることができる。「こうした編成のなかで大衆は、自己の理想的な主体の焦点を自己自身の外にもつことになるわけである」[スローターダイク 2001: 22]。そして、ヒトラーという「最良の自己」を通して美化された自分自身の姿こそ、「民族共同体」にはほかならない。『意志の勝利』の観客もまた、総統の視線で大衆を俯瞰する映像を通じて、みずからの一体性を認識したのである。

大衆の一体性は、彼らを取り囲む巨大な建造物によってさらに高められた。1937年の大会でヒトラーは、この点を次のように説明している。

「それはわが国民を政治的にこれまで以上に統一・強化するのに役立つし、社会的にもドイツ人にとって誇りある共属感の要素となり、このわが共同体の強力が巨大な証人にくらべて、その他の世俗的な相違が取るに足らないものであることを社会的に証明するだろう」[Domarus 1973: 719]。

党大会の施設は、その圧倒的な大きさによって、これにむきあう人々の身分や階級の違いを無意味にし、彼らを「民族共同体」に統合するのに役立つというのである。なかでもツェッペリン広場の正面スタンドは、長さが390メートル、高さが24メートルあり、広場じたいも幅が312メートル、奥行が290メートルに達し、全体で約24万人を収容することができた<sup>8)</sup>。しかもこの広場は、四方を取り囲むスタンドや周囲に林

8) 党大会の会場には、ツェッペリン広場やライトポルト競技場などのほか、40万人を収容するドイツ・スタジアムや、50万人を収容する三月広場などの施設群が計画されていた。



立する党旗によって外部から閉めきられ、内部の一体性が高められていた。とくに夜間の集会では、周囲の150基のサーチライトが上空を照らし、会場全体をつつみ込む「光のドーム」が出現した（図版2）。ある新聞報道が伝えるように、「ここでは運動の祈祷時間が催され、光の海によって外の暗闇から守られている」[フォンドウク 1988：217] のだった。イギリス大使ネヴィル・ヘンダーソンによれば、それは「まるで氷の神殿のなかにいるかのように荘厳かつ華麗だった」[シュペーア 1970：70]。シュペーアはこれを「シュールレアリスムの非現実感」と呼び、「それは私のもっとも美しい空間創造であっただけでなく、時代をこえて生き残った唯一の空間創造でもあった」[シュペーア 1970：70] と自画自賛している。ともあれ、こうした空間創造によって外部との間に境界が設定され、「民族共同体」の舞台が出現することになった。会場に集まった数十万の人々は、この壮大な舞台の観客であると同時に出演者でもあり、そうした二重性のもとで「民族共同体」が実演されることになる。

「民族共同体」は、何よりも整然とした直線的な空間構成によって表現された。ポイカートがいうように、その構成原理は「個々の要素の標準化、参加者の画一化、あるいは基本的な建築体をできるかぎり純粋な形態、しばしば立方体に還元すること」[ポイカート 1993：137] にあった。とくにツェッペリン広場は、会場そのものが方形をなしていたばかりでなく、会場を取り囲む建造物も、立方体を単位として直線的に構成された。石造の正面スタンドは、演壇を中心に左右に連なる列柱と階段の水平性や、ブロックを積み上げたような簡素で堅固な量塊性などによって、古典主義的な様式美のなかに力強さや重々しさを表現しており、設計者のシュペーアによれば、「これはいうまでもなくベルガモン神殿の影響を受けていた」[シュペーア 1970：66]（図版3）。さらに会場を埋めつくす群衆も、密集して強固なブロックを形成し、整然たる秩序のもとに配列されていた。新聞報道によれば、「正方形のツェッペリン広場は20本のまっすぐな柱によって分割され、これらの柱には14万人の政治指導者が12列に整列していた」[フォンドウク 1988：216]。ヴァルター・ベンヤミンが述べるように、「ファシズムが強靱と見なすモニュメントの素材は何よりもいわゆる人的資源である」[ベンヤミン 1981：159]。ここには人間を建築資材に見立てる視点、「人的資源」によって「民族共同体」を建設しようという意志があったといえるだろう。たとえば1934年の大会で演説したヒトラーは、足下を指さしながら「党はこのこのブロックと同様に確固としている！」[Domarus 1973：453] と断言しているし、ゲッベルスもまた、

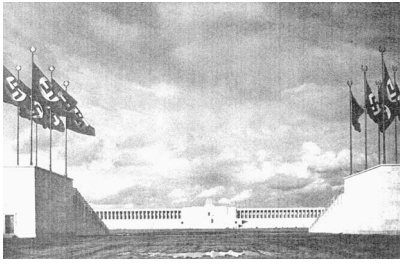
政治家とは大衆という「素材」から「民族の堅固で明確な形態」[Stollmann 1976: 87-8] をつくり上げる芸術家であると説いていた。正確な方陣をなして整列する群衆は、彼らがむきあう石造建築とともに、花崗岩のごとき強固なモニュメントを形成し、「民族共同体」の団結を実演したのである。それがナチズムの自己表現として何を伝えようとしていたかについては、1933年の大会におけるヒトラーの次の発言がわかりやすいだろう。

「この党にはかつてないほど強固な組織、決然たる意志、厳しい自己規律、無条件の規律、下への責任ある権威と上への権威ある責任の尊重がある。そうした精神からのみ、経済的その他の生活がもたらす想像上・現実上のあらゆる相違をもこえて、われわれの民族体を強化することができる。これによってのみ、市民や農民や労働者やその他すべての階級から、ふたたび1つの民族を育成することができるのだ！」[Nürnberg 1933: 17]。

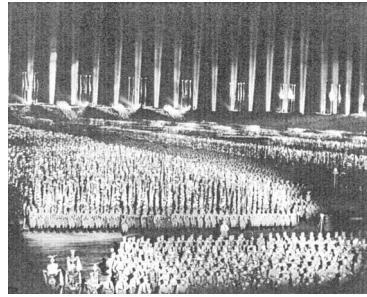
もともと、ヒトラーの眼前の群衆はただ単に堅固なブロックを形成しただけではなく、隊列行進や旗の波など、洪水のような流れも生みだした。1937年の大会における「旗の入場」について、新聞報道は次のように伝えている（図版4）。

「ライ博士が『旗の入場』を告げる。まだ何も見えない。だがその後、それはまっ暗な夜からあらわれる——南面のむこう側に。それは7本の柱となって、隊列の間の空間に流れ込む。人間も旗手も見えず、認められるのはただ波打つ赤い幅広い流れであり、その表面は金銀色にきらめき、灼熱の溶岩のごとく、ゆっくりと近づいてくる。人はこのゆっくりと近づいてくるものにダイナミズムを感じ取り、この聖なるシンボルの意味についておぼろげな印象を受ける。それは2万5000本の旗であり、これらの旗のもとに参集するのは、帝国全土の2万5000の地方支部や地区や経営である。これらの何千もの旗手はいずれも、それぞれの旗の布を命がけで守る覚悟をしている。彼らのなかで、この旗を究極の命令かつ最高の義務と考えない者は誰もいない。」[フォンドゥンク 1988: 217]。

ここでは「流れ」が「柱」へと姿をかえるのであり<sup>9)</sup>、クラウス・テーヴェライトに



図版3 ツェッペリン広場の正面スタンド

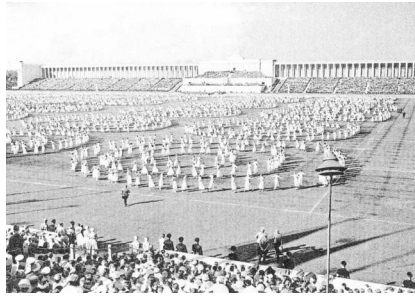


図版4 「旗の入場」

よれば、「ファシズムはこのようなかたちで、人間の内的状況を巨大な外的モニュメント、装飾へと変形させた。それは大量の人間を流れ込ませ、彼らの願望を少なくとも、あらかじめ定められた、モニュメントとして巨大化された河床に流れることを許す、排水のシステムである」[テーヴェライト 1999：638]。大衆のエネルギーは解放されるが、それは彼らの陣形の枠内にかぎられる。「つまり、儀式においてファシストはみずからの解き放たれた欲動を表現すると同時に、この欲動を抑圧する原理をも表現するのだ」[テーヴェライト 1999：637]。数十万の人々が築き上げる強固なモニュメントは、彼らのエネルギーを権力の論理に従属させ、秩序の勝利を示そうとする試みをあらわしていた。こうした観点からすれば、党大会は運動のダイナミズムを制御することで、これを「民族共同体」の建設へとキャナライズする機構だったといえよう。

だが党大会が大きな興奮を呼び覚ましたとすれば、それは統制された隊列の枠内ではあれ、参加者の欲動を解放したことが大きかったと考えられる。とくに30年代半ば以降、党および突撃隊の政治的重要性が低下し、運動の革命的エネルギーがせき止められたため、これにはけ口を与える必要性が高まっていた。そうしたはけ口の1つが、ユダヤ人商店への狼藉などとならんで、党大会における示威行動であった。総統の観閲を受けるという榮譽に浴することで、党員たちは過去1年間の労苦にたいする報いと、今後1年間の闘争のための活力を得たのである。党大会は、彼らの重要性が示さ

9) この点に関してテーヴェライトは、「流れる『女性的なもの』は固い『男性的なもの』に変身する」と述べて、ジェンダーの視点から考察を加えているが、ここでは彼の考察のうち、大衆の内的状況と外的形式の関係にかかわる議論に焦点をあてることにする。



図版5 「共同体の日」

れる場として、職務でみたされなかった願望を埋めあわせる機会を提供したのだった。「運動の祭典」としての党大会は、参加者に規律を押しつけるだけでなく、彼らのダイナミズムを解放する場でもあった。膨大な参加者の活性化したエネルギーは、広大な集会場をもってしても統制しきれなかった。「ツェッペリン広場はあまりにも小さいことがわかる。スタンドは、たえまなく押し寄せる人々の巨大な流れを収容しきれない」[フォンドゥンク 1988：216]。

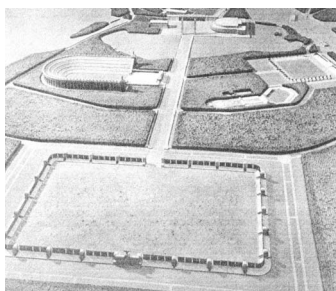
この点では、1937年の大会から導入された「共同体の日」の目的も、欲動の発散にあったと見ることができる。そこでは集会や行進ではなく、若者たちのスポーツ競技や集団体操、少女たちのダンスがおこなわれ、規律とともに「生の喜び」が表現された(図版5)。大会の公式報告によれば、「この日は肉体的規律の賛歌であり、スポーツ能力の賛歌であり、同志との共同体における生の喜びの賛歌でもあった」[*Der Parteitag Großdeutschland* 1938：174]。なかでも「ナチ闘争競技」と呼ばれたスポーツ競技は、「新しい高貴なドイツ的人間の聖別と闘争の場」として、「エネルギーと規律の勝利」[*Der Parteitag der Arbeit* 1937：11]を祝うものとされた。ヒトラーはおそらくベルリン・オリンピックの成功を意識して、1936年にこれを「近代的な形態と別の名前をもつ新しいオリンピア」[*Der Parteitag der Ehre* 1936：290]と呼んだが、その内容は準軍事的な訓練がほとんどだった。競技の焦点は、これを観戦する「総統」にあった。「この日に大きな意義を与えたもの、いやむしろその意味のすべては、総統が列席していたことだった」[*Der Parteitag Großdeutschland* 1938：174]。だがこの「ナチ闘争競技」が「共同体の日」におこなわれたことじたい、その目的を雄弁に物語っていた。つまりそれは、人々を「民族共同体」のための「闘争」に駆り立てようとするものだったのである。かくして「民族共同体」の建設は、スポーツ競技のような性格

をとることになった。そこに垣間見られるのは、同志との闘争が同志との共同体を形成するというナチズムに特有の政治的レトリックである。「共同体の日」に関する公式報告は、「民族共同体」の特徴を的確に要約している。

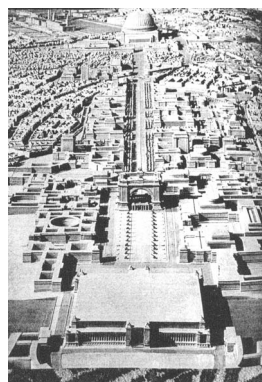
「共同体は行進するだけでなく、いやむしろそれは今日、この祭典に枠組みを与えている石造の巨人と同様に、確固たる基盤の上に立っている……隊列は組まれている。共同体は鑄造されたかのごとく一体である……若さ、音楽、力、男らしい肉体美のシンフォニー……共同体は壮麗で力強く、熱狂的である。それが姿をあらわすのは、総統が呼ぶときだ！」[*Der Parteitag Großdeutschland 1938* : 175-7]。

「民族共同体」の上演は、党大会以外の舞台でもくり返された。党大会の運営を担ったライ配下の帝国組織指導部は、党の大管区・管区の集会や催しも委託されており、組織面で影響力を行使した。もっともナチ政権下の様々な祝祭や式典のうち、国家的な性格をもつものについては宣伝省が、党に属するものについては帝国宣伝指導部が管轄し、いずれもゲッベルスの指導下にあった。したがって、党の催しに関してはライとゲッベルスの権限が一部重複し、さらに党の大管区指導者も干渉を拒む傾向が強かったため、運営はきわめて錯綜した様相を呈することになった。ゲッベルスが帝国宣伝指導部の積極的宣伝局を通じて「建築的造形を含む最大規模の大集会から、管区ないし支部の集会の実行までに付随する、あらゆる宣伝活動の組織的実行」[*Der Reichsorganisationsleiter 1936* : 296]を担い、文化局を通じて「闘争時代に生まれた形態の伝統を基盤とする、ナチ運動の祝祭とナチ集会の枠組み形成のための模範プログラムの作成」[*Der Reichsorganisationsleiter 1936* : 300]を担う一方、ライも帝国組織指導部を通じて党大会をはじめとする党の催しを組織したほか、歓喜力行団を通じて「労働生活ともっとも密接な関係にある夕べの催しの形成」[*Der Reichsorganisationsleiter 1936* : 192]を担うなど、多元的な指導がおこなわれた。だがライの傘下にあった歓喜力行団の指導者にゲッベルスの部下ホルスト・ドレスラー＝アンドレスが就任したことをはじめ、両者の間に一定の協力関係が成立したため、深刻な対立が生じることはなかった。事実、錯綜した権限体系にもかかわらず、集会のプログラムや行進の演出、参加者の配置、会場の設営など、少なくとも形態上は、党大会から地域レベルの催しまで、基本的に同じ構造が保たれていた。「最高の祝祭」としての党大会は、





図版6 ニュルンベルク党大会会場の模型



図版7 ベルリン都市計画の模型

各地から参集した党员たちにとって、任地での活動のための練習場というべき役割をはたし、これを模写した無数の集会を生み出すことになったのだった。

党大会の影響はさらに、公共建築や都市計画にも及んだ。会場の設営で頭角をあらわしたシュペーアが責任者となって、ニュルンベルクとベルリンで大規模な建設プロジェクトが進められたが、党大会会場全体の建設計画では会議ホールと三月広場を結ぶ大通りが、「帝国首都再編」計画では大集会ホールと凱旋門を両端にもつ大通りが軸となっており、いずれもライトポルト競技場の設営と基本的に同じ構造をあらわしていた（図版6・7）。シュペーアによれば、「ほかの諸都市にも、ベルリンの都市計画に追随する構想がたくさんあらわれた……そしてこれらの計画のほとんどどれもが、私の交差軸プランを踏襲したばかりか、垂直方向のプランもまったく同一だった」[シュペーア 1970：159]。ヨアヒム・ペツチュが指摘するように、「あらゆる再編計画の基本的モチーフは、中心的な十字の軸、大通りと、もっとも重要な国家ないし党の建物（とくに民衆ホールと大管区指導者の官庁）がならぶ大広場だった」[Petsch 1994：23-4]。党大会で表現された空間構成は、ニュルンベルクの会場のみならず、第三帝国の公共生活全体を特徴づけることになったのである。

以上の分析を通じて、党大会で上演された「民族共同体」の基本的な構造が明らかになったと思われる。すなわち、それは膨大な数の人々を収容する広大な空間であり、総統を中心に大衆を水平に一体化し、厳格な規律によって彼らを直線的に配列するとともに、この秩序の枠内で大衆のエネルギーを解放するものだった。しかもそれは、第三帝国下の政治的・社会的現実を反映していたという意味で、現実の象徴的表現で



あったばかりでなく、政治的・社会的現実に影響を及ぼしたという意味では、現実が準拠すべき模範でもあった。だが忘れてならないのは、党大会があくまでも党の催しだったということである。ナチズムに心酔していた党員や隊員、熱狂的な支持者はともかく、それ以外の大部分の国民にたいしては、党大会は直接に統合力を発揮したわけではない。ゲッベルスの率いる宣伝省の内部でも、政治的な催しだけでは国民の忠誠心を維持できないという認識が一般的であった。事実、第三帝国下の世論動向に関する諸研究は、党による政治的な催しの効果に疑問を呈しており、党大会の演出が無条件に参加者を惹きつけたと考えてはならない<sup>10)</sup>。そこで次に、人々がどう反応したかを中心に党大会の舞台裏を考察し、「民族共同体」の演出と現実の関係を明らかにしていくことにしたい。

#### 4 民衆の祭典

党大会の期間中、ニュルンベルクの町は異様な興奮につつまれた。それは比較的冷静なはずの外国の観察者にも圧倒的な印象を与え、フランス大使アンドレ・フランソワ＝ポンセによれば、「この1週間、ニュルンベルクは歓喜だけが支配している町、魔法にかかった町、ほとんど有頂天になった町といえる」[フェスト 1975 下：491]ほどだったという。だが党大会について語る参加者の回想には、その舞台裏が暗示されている。

「1933年のことです。そのとき、私はわれわれの総統の前を行進しました。われわれは、興奮の大海のなかで、みなと泳ぎました。しかし、ニュルンベルク行きは、けっして心地のよいものではありませんでした。車輛は混んでいたし、テントに寝泊まりしました」[ケンボウスキ 1973：42]。

興奮の渦に巻き込まれた参加者でさえ、長時間の汽車の旅や劣悪な宿泊施設、徒歩の行軍などで疲労困憊し、辛い経験をせざるをえなかったのである。なかには大会そ

---

10) 第三帝国下の世論動向に関する史料としては、亡命社会民主党の『ドイツ通信』[Behnken 1980]と親衛隊保安部の世情報告[Boberach 1984]がある。ただ後者には1938年以降の報告しか収録されていないので、ここでは主として前者を用いることにする。

のものに失望した者もいた。1935年の大会にヒトラー・ユーゲントの一員として参加し、後に「白バラ」の抵抗グループに加わることになるハンス・ショルの体験について、妹のゾフィーは次のように記している。

「この頃、彼に特別な任務が与えられた。ニュルンベルクの党大会に隊の旗手として参加することになったのだ。彼の喜びは大きかった。しかし大会から帰ってきたとき、私たちは目を疑った。彼は疲れはて、顔には失望の色が深く刻み込まれていた……彼が望んでいたのは、若者たちがそれぞれに、自分のなかに潜む特技を引き出すことであった。個々人がそれぞれの想像力と着想と特性をもってグループに貢献すべきものと考えていた……しかしそこ、ニュルンベルクでは、すべてが一定のかたちにはめ込まれてしまっていた。明けても暮れても、いまは忠誠だけを大声でくり返した。しかしいったい、猫も杓子も忠誠を誓う根拠は何か。まずは自分自身への忠誠が第一のものではないのか……何たることか！ ハンスの心に激しく騒ぎはじめるものがあった」[フォッケ／ライマー 1984：30-1]。

これはおそらく極端な例だと思われるが、党大会が熱狂をもって迎えられなかったことは、亡命社会民主党の『ドイツ通信』も指摘するところであった。1936年の報告は次のように記している。

「ニュルンベルク党大会は今年、一般的な無関心に直面した。せいぜい費用をたずねる者がいる程度である……党や他の支部のメンバーの間では、参加への熱狂はまったく見られず、その反対に、多くの者はあらゆる可能な口実を使ってサボろうとした」[Behnken 1980 Bd.3：1109-10]。

1937年の報告はさらに詳しい。

「今年も同じような無関心が支配していた。例外は参加者である……最初の2、3年はナチは歓迎され、住民はまだ総統のメッセージに耳を傾けており、そのメッセージはたしかに驚きをもたらすのが通例だった。党支部のメンバーが駅まで行進すると、通りにはしばしば男女の集団、とりわけ若い人々が集まって、党の

兵士に喝采を贈ったものだった。こうしたことはすべて過去のものである。盛大な権力の展開も長くつづけば退屈になるし、月並みな演説はうんざりするほど既知の内容である……ニュルンベルクにやって来たナチの部隊は黙ってやりすごされた。あちこちで頑迷な人のハイルの叫び声が上がったが、誰も同調しなかったため、おずおずと声が小さくなった。住民にとって、この宣伝騒ぎは他のすべてと同様に暴利をむさぼるものであり、その費用を負担しなければならないが、それ以上のものではない。いつも同じ光景。軍隊、行進する隊列、旗の集団……参加者は熱狂とはほど遠い状態だった。多くの者は、ニュルンベルクでは1日中あちこち行進したり、立ったりしなければならぬので、むしろ家にいたかったと説明した……彼らにとって、参加は辛い訓練の命令であり、むしろ放棄したいものだった」[Behnken 1980 Bd.4 : 1224-5]。

党员も一般大衆も、党大会への関心は非常に低かった。大会参加者は1933年の35万人から1938年の45万人の間で比較的安定しており、ニュルンベルク市の収容力が限界に達していたことを考慮しても、明らかに伸び悩みの徴候を示していた [Zelnhefer 1991 : 130]。大会の様子はメディアを通じてドイツ全土に報道されたが、これもほとんど反響を呼ばなかったようである。「ラジオと新聞による詳細な報道も、党大会の期間中ですら、真に大衆をつかむことはまったくなかった」[Behnken 1980 Bd.2 : 1019]。『意志の勝利』にしても、その記録的な観客動員数は宣伝キャンペーンや入館料の割引、党組織や学校ごとの集団鑑賞など、様々な動員の圧力がかけられたことによるもので、民衆の関心を反映してはいなかった [Stahr 2001 : 106-7]。『ドイツ通信』は次のように報告している。

「党大会映画『意志の勝利』は非常に魅力がなかった。突撃隊員と親衛隊員は50%の割引が与えられたにもかかわらず、彼らのうちほとんど誰も映画を鑑賞しなかった。政治組織のメンバーも少数しかいなかった……映画はそもそもたった3日間上映されただけだった」[Behnken 1980 Bd.2 : 714]。

人々は概して党大会に無関心であり、多くは義務として参加していたというのが実情だった。こうした状況のもとで一定の参加者を確保するため、大会組織者は参加者

に様々な便宜をはかることになった。『ドイツ通信』は1935年に次のように指摘している。

「ニュルンベルクのナチ党大会は今回、組織的に非常にうまくいった。参加者は非常によい食事を与えられた。前年の行進の多くはおこなわれなかった。参加者は毎日長い行列を形成しなくてよかった。個々の団体が別々の日に活動したからである。これによって町や周辺を見物したり、行進を観察したりするのに十分な時間ができた……ニュルンベルク行きを望んだ者は、ともかく存分に楽しもうとしていたが、それは汽車賃も食事も無料で、小遣いまで与えられたからである。経営や鉱山から選ばれたニュルンベルク旅行者は、非常に満足して帰ってきた。経営者は5日分多く賃金を支払わねばならず、そのために汽車賃と食事つき宿泊費が無料になった。それに加えて、経営の代表はほぼ例外なく15マルクの小遣いを与えられた」[Behnken 1980 Bd.2 : 1019]。

参加者から見れば、これは観光旅行を援助してくれるという美味しい話だった。「多くの者はまた、できるだけ騒ぎから遠ざかっていれはすむことだと考えて、1度安い料金でニュルンベルクへ行くため、運賃割引などといった様々な特典を利用しつくした」[Behnken 1980 Bd.3 : 1110]。こうした実態はやがて当局の知るところとなり、「党の金で旅行をして、党大会を物笑いの種にする」[Behnken 1980 Bd.3 : 1111]ようなことをやめさせるため、参加者への援助はうちきられ、古参闘士のみが派遣されるようになった。1937年には経済組織の指令によって、「個々の経営が参加者の賃金の損失を全額ないし一部補填するかどうかについては、経営の自由に任される」[Behnken 1980 Bd.4 : 1226] ことになった。だがこのことが多くの人々から参加の意欲を奪った。「多くの突撃隊員は、参加に伴う特別支出を負担する余裕がもはやないという理由で、参加を断った」[Behnken 1980 Bd.4 : 1225]。

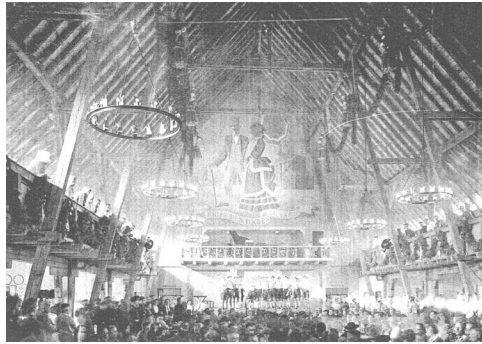
党大会の魅力が薄れるなかで、客寄せのために重視されるようになったのは、娯楽や気晴らしを提供する各種の催し物だった。「民衆の祭典 Volksfest」と銘打って、毎年大会期間中の土曜日に会場周辺で様々なアトラクションが提供されたが、そのなかにはスポーツの試合から大道芸、演劇、ダンス、映画上映、ビアガーデン、打ち上げ花火まで、ありとあらゆる催し物が含まれていた[Zelnhefer 1991 : 203-4]。行進や演

説といった公式行事よりも、これらの娯楽が人々を惹きつけたことは、会場を訪れたある少年の作文に示されている。

「9月14日土曜日、僕は数人の同級生と一緒に自由の帝国党大会へ行った……さらに僕の注意を引いたのはサッカー選手だった。ドイツ・チャンピオンのシャルケ04とニュルンベルク＝フェルトの選手が広場に走って入ってきた。前半は無得点だった……後半は不当にも1：0でシャルケの勝利となった。晩8時に大花火がはじまった。1935年9月14日の大花火は美しい終幕だった」[Rossmeißl 1985：148-9]。

ツェルンヘファーの研究が明らかにしているように、党大会が年を追うごとに形式化し、退屈なものとなるにつれて、大会組織者は娯楽の要素を強化するようになった。それを示すのが、1937年に導入された「共同体の日」であり、そこでは主にスポーツや体操、ダンスが披露されたのだ。また打ち上げ花火や松明行列、シュペーアの「光のドーム」といった演出も、党大会が「ショー」の性格を強めるようになったことを示している。この関連では『意志の勝利』にも、花火見物に興じる突撃隊員や、宿営地で楽しい一時が描かれていることも見逃せない。さらに「民衆の祭典」のプログラムも、1934年から余暇組織の歓喜力行団に委託され、37年にはそれまでの1日かぎりの祭典が拡大されて、毎夕4時から会場近くの「歓喜力行団都市」で常設の祭典が開催されるようになった。「歓喜力行団都市」にはいくつもの大ホールが設置され、ドイツ各地の名称がつけられたこれらのホールでは、「生を喜ぼう」という標語のもと、ビールとともに音楽やダンス、演劇、大道芸などが提供された[Zelnhefer 1991：205]（図版8）。無料で参加できるこの楽しいお祭りこそ、新聞報道によれば、「帝国党大会の参加者全員の目的」[Zelnhefer 1991：206]であった。娯楽の拡充とともに、党大会の観客は1933年の12万人から1938年の82万人へと増加し、党と距離をおく人々も会場を訪れるようになった[Zelnhefer 1991：130]。

とはいえ、「民衆の祭典」は単なるお祭りではありえず、政治的な目的のために催されたこともたしかである。歓喜力行団が作成したパンフレットの序文は、「民衆の祭典」の目的を次のように説明している。



図版8 「歓喜力行団都市」のホール

「われわれはより高貴な存在が作りだした生を肯定する。そしてこうした精神のみがわれわれの共同体の祭典を規定すべきであり、その内容は安酒場のようなものでもお祭り騒ぎでもありえない。厳しい競技や軽快なゲームに参加している澁刺としたスポーツ選手や体操選手、音楽や歌や優美なダンスでわれわれの民族性をいきいきとしたものに保つ笑顔の若者たち……はむしろ、力、美、生の肯定、喜びといったわれわれの概念に対応している。われわれはこのように1936年帝国党大会の『歓喜力行団』民衆の祭典を共同体験したい」[Zelnhefer 1991: 202]。

地元新聞の報道によれば、この祭典は「生の喜びの告白」であり、「労働と喜び」の一致を通じて階級対立のない新しい社会秩序を建設しようとする意志の表現であって、「この新しい生の様式が喜びの都市、われわれの歓喜力行団都市を完全に支配していた」[Zelnhefer 1991: 206] という。この「50万人の民衆の祭典」は、「真のドイツ的な民衆の祭典」として、「ドイツ民族共同体の忘れがたい体験」[Zelnhefer 1991: 204] となるべきものだった。

だが実際には、「生の肯定」や「生の喜び」はしばしば純然たる乱痴気を意味し、「民衆の祭典」はまさに当局が否定した「安酒場」や「お祭り騒ぎ」のごとき様相を呈することになった。ツェルヘファーが明らかにしているように、泥酔した党員が公序良俗を乱したり、規律を欠いた隊員が行進を台無しにしたりするような事態は、大会組織者にとって悩みの種でありつづけた [Zelnhefer 1991: 260-5]。参加者の多くが「生の喜び」に興じたことは、彼らに要求された規律と矛盾することになったのであ



る<sup>11)</sup>。ジョージ・L・モッセは、党大会のような式典では「見せ物や軽薄な娯楽」といった「心地よさ Gemütlichkeit」[モッセ 1994：213]の要素が排除されていたと述べているが、大会の実情を考慮に入れば、これは党の意向だけを反映した不正確な指摘といわざるをえない。たしかに公的行事では厳格な規律が要求されたものの、人々をこれに動員するうえで決定的な役割をはたしたのはむしろ「心地よさ」だったからである。党にとって、党大会は「運動の祭典」でなければならず、「民衆の祭典」と受けとめられるべきものではなかったが、多くの人々の目には、党大会はまさに「民衆の祭典」として映じていたのだった。

この祭典の主催者である歓喜力行団は、ドイツ労働戦線の余暇組織として、娯楽の「喜び」を通じて労働者の「力」を回復させることを課題としていた。それは国民の忠誠心を維持するために娯楽を重視した宣伝省の方針とも一致するものであり、いわば楽しませながらナチ化するという目的を志向していた。党の定義によれば、歓喜力行団の課題は次のようなものだった。

「ナチ的世界観が要求する共同体生活の喚起と強化のため、ナチ共同体『歓喜力行団』はつねに新しい方法とつねに新しい手段をもって、ドイツの労働者を理想の崇高な世界へ引き入れ、彼らが共同でつくりだす生の意味と偉大さを全力で信仰することができるようにしなければならない。したがって、ナチ共同体『歓喜力行団』は単なる余暇やタベの催しの組織ではなく、生についての新しい見解をもたらそうとするものである。それは生を肯定するナチ的観念の最強の表現である」[Der Reichsorganisationsleiter 1936：192]。

旅行からスポーツ、演劇、ダンス、社会人教育まで、ありとあらゆる余暇の領域をカバーした歓喜力行団のアトラクションは、まさに大衆的な人気を博した<sup>12)</sup>。とくに

11) この矛盾はとくに、ある郷土詩人の著作をめぐる騒動に示されている。パウザーラのペンネームで党大会の顛末を描いたこの著作は、当初『ニュルンベルク党大会のクノール』と題して、ある党務担当者が大会を楽しむ様子をユーモアたっぷりに描いていたが、党の批判を受けて変更が加えられ、主人公が党務担当者でなくなるとともに、題名も『古きよきニュルンベルクの祝祭』にあらためられたのだった [Zelnhefer 1991：257-9]。

12) 『ドイツ通信』の1936年の報告は、次のように述べている。「歓喜力行団の催しへの人

「夕べの催し」局は、1938年だけで14万回以上の催しをおこない、5000万人以上の参加者と観客を得た [Buchholz 1976: 273]。そのプログラムには、「民衆放送活動、公開歌唱、歌唱・音楽共同体、素人劇・舞踊・大道芸集団、帝国アウトバーンや公共建築の宿営地の祭典、五月祭や夏至のような民衆の祭典、党大会の民衆の祭典、種々の催しの夕べ、経営共同体の夕べ、村落共同体の夕べ、演劇、コンサート、展覧会、移動劇団など」 [Der Parteitag der Ehre 1936: 258] があった。これらの催しの大部分は民俗的な性格をもち、純然たる「民衆娯楽」も少なくなかった (図版9)。『ドイツ通信』の評価は一様ではないが、1935年の報告は「夕べの催し」の反響について次のように述べている。

『歓喜力行団』の夕べの催しの入りは、たいてい非常によかった。それは軽い娯楽を提供したが、参加者はたえずナチのたわごとを我慢しなければならなかった。だがそれは簡単な息抜きを見つけるには安上がりな機会であった。そこではまた古きよき友人がとても気楽に出会い、ビールを飲みながら主催者が意図しているのとは正反対のことを話しあうことができた」 [Behnken 1980 Bd.2: 846]。

催しの政治的目的とは関係なく、参加者の方ではこれを楽しいお祭りとして受けとめ、気軽に参加する雰囲気があった。そこには党が国民を民族共同体に動員しようとする一方で、国民はむしろ娯楽や気晴らしをもとめていたという両義的な関係が示されている。真剣さと心地よさは対立関係にあったが、両者は実際には同一の現実を形成していたのだった。こうした状況のもとで、最初は催しに反感をもっていた人々が、しだいに進んで参加していく傾向も見られるようになった。『ドイツ通信』の報告が認めているように、「歓喜力行団の催しにたいするわれわれの同志の態度は、非常に変化した。最初は拒否していたのが、いまや熱心に参加するようになった。だがそれは次のような考えから生じたにすぎない。すなわち、『われわれの金がすでにこのように支払われているのだから、そこからでもできるだけ多くのものを得よう』という考えである」 [Behnken 1980 Bd.2: 1461]。こうした傾向によって少なくとも消極的な

---

気は、非常に大きなものとなっている……民族同胞の大部分は、歓喜力行団をナチズムの本当にすばらしい成果として評価している」 [Behnken 1980 Bd.3: 881]。



図版9 歓喜力行団の催し



図版10 歓喜力行団の船旅

合意が達成されたが、なかには催しを通じて「民族共同体」の理念を受け入れる者もあらわれるようになった。歓喜力行団が主催したマデイラ島への船旅に関する『ドイツ通信』の報告は、共同体精神に訴える催しに、労働者も心を動かされずにはいられなかったことを明らかにしている（図版10）。

「注目に値するのは、この旅行が古い同志にさえ大きな印象を与えたことである。彼はたとえば次のように説明した。『認めなければならないのは、これまでわれわれの間には残念ながら存在しなかったような同志関係が、旅行の間ずっと支配していたことである。貧者がどこでも気後れを感じなくてすむように、富者は彼らに金を与えることまでして助けた。船上にはいかなる差別もなく、すべてが1つの心で1つの魂だった。われわれ社会主義者がつねに待望してきた何か平等なものが、そこには本当に存在していた、といわなければならない……』」  
[Behnken 1980 Bd.2 : 848]。

参加者は必ずしもナチズムに共感していたわけではなかったが、こうした催しのなかで差別なく扱われ、たがいに親睦を深めて一体感を得ることで、「民族共同体」を実感することができた。ヴォルフハルト・ブッフホルツがいうように、歓喜力行団は「われわれ意識の『練習場』」[Buchholz 1976 : 393] というべきものであり、そこで培われた対面的な信頼関係が「民族共同体」の理念を具体的な意味でみたしたのである。その点では党大会も同じだった。1937年の『ドイツ通信』は、ニュルンベルクに派遣された炭鉱労働者について、次のように報告している。

「彼らは眩惑されたかのようにニュルンベルクから帰ってきた。『われわれは依然としてナチスになるつもりはないが、あのような大衆行進や組織能力は催眠術のようだ』と彼らはわれわれに説明し、『この体制をまだ転覆することができるという信念をすべて失わせるほどのものだ』と述べた。これはもっとも本質的な印象だった。辛労や他の多くの不愉快なことについてナチスがたがいに悪態を吐くのを彼らが途中で耳にしたとしても、それは二義的なものにとどまった。とくに富者と貧者、上司と従者の共同行進が印象的だった。この見せかけの同志関係は、『民族共同体』のすぐれた広告となっている。まぎれもない事實は、今年の党大会がまったく何も新しいものをもたらさなかったにもかかわらず、さしあたり当分の間はふたたび意図された効果を発揮するだろうということである。それも参加者だけでなく、あらゆる住民階層にたいしてである」[Behnken 1980 Bd.4 : 1226]。

経営の代表としてニュルンベルクに派遣された労働者は約6000人にすぎなかったが、党の賓客として処遇され、多くの場合は金銭的な援助も受けていた[Zelnhefer 1991 : 130-1]。彼らは党大会の式典で他の参加者と一緒に行進し、各種の催しで親睦を深めることで、「民族共同体」を体験したのだった。

要するに、党大会も歓喜力行団の催しと同じく、共同体体験の練習場というべき役割をはたしたといえよう。党大会の公式行事はほとんど関心と呼ばず、多くの人々は受動的に参加していたにすぎなかったが、党の政治的な要求と国民の非政治的な享楽欲とが結びつくなかで、いわば『『観念的』共同体イデオロギーの実利的解釈』[Voges 1981 : 362]を通じて「運動の祭典」が「民衆の祭典」と読みかえられ、楽しい催しを通じて人々に「われわれ意識」が芽生えたとき、党大会で上演された「民族共同体」はリアリティを獲得したのである。

## 5 おわりに

「民族共同体」の理念と現実の関係について、あるドイツ女子青年団のリーダーは次のように述べている。

「われわれの宿舎共同体は、私が民族共同体についてイメージするもののミニチュア版であった」[ポイカート 1991 : 234]。

ここでは眼前の「宿舎共同体」が「民族共同体」のイメージを通じて認識されるとともに、このイメージが「宿舎共同体」という対応物によってリアリティを獲得している。つまり、「民族共同体」そのものは目に見えない、ぼんやりとした理念にすぎないのだが、この理念が実在の「宿舎共同体」と関係づけられることで、いきいきとしたものとなっているのである。党大会をめぐるでも、同じような対応関係が成立していた。「運動の祭典」で提示された「民族共同体」はあまりにも抽象的で、熱狂を呼びおこすような力をもたなかったが、「民衆の祭典」での共同体体験と関係づけられることによって、それは具体的な意味を獲得した。いいかえれば、集会や行進が人々を熱狂させる必要はなく、それが「民族共同体」を表現する重要な行事であることを認識させるだけでよかった。というのも、そうした行事に付随する様々な催し物の人々に一体感をもたらし、曖昧に表現された「民族共同体」を実感させてくれたからである。ニュルンベルクで上演された「民族共同体」は、現実が準拠すべき雛型として、無数のミニチュアを生み出すと同時にこれらによってリアリティを付与されるというかたちで、社会全体に影響を及ぼした。もっとも、党大会の公式行事を模したミニチュアよりも、娯楽の要素を強めたミニチュアの方が需要が大きかったようであるが。

クリフォード・ギアツによれば、「政治的権威はそのなかでそれ自身を定義し、その主張を提示するための文化的枠組みをいまもなお必要としている」[ギアツ 1991：241]。こうした「文化的枠組み」が上演される舞台を、ギアツは「中心」と呼んでいる。「そうした中心は社会のなかの1つあるはいくつかの点であり、そこでは社会の支配的な思想と支配的な制度があいまって、その構成員の生活にきわめて重大な影響を与える出来事が生起する舞台をつくりだす……それは大衆へのアピールや創造的熱狂の記号ではなく、物事を中心の近くにいるということの記号なのである」[ギアツ 1991：214]。この指摘はナチ党の党大会にもあてはまるものといえよう。第三帝国の「文化的枠組み」が「民族共同体」だったとすれば、「中心」はニュルンベルクだった。しかもそれは熱狂を呼びおこしたというよりはむしろ、そうした印象を与えるほど重要な出来事だったのである。党大会でヒトラーを目撃した人々の回想にも、そうした基調を見いだすことができる。

「みんながニュルンベルクへ乗り物でやって来ました。みんなが興奮していました……私はそうですね、幅広い歩道のそばに腰かけていました、ヒトラーは私の

すぐそばを通過して行きました」[ケンポウスキ 1973：48-9]。

他の人々はみな興奮していたが、自分はそれを尻目に冷静さを保ったというわけである。だがどんなにさめていたとしても、この人物も少なくともそれが重要な出来事であることを暗黙のうちに認めていた。「民族共同体」の理念は、こうした暗黙のレベルで人々の意識に植えつけられたといえよう。

もっとも、「民族共同体」の理念は曖昧なままであり、多様に表象することが可能だった。とくに党の領袖たちはそれぞれの流儀で「民族共同体」を表象し、それらの表象がたがいに矛盾していたため、激しい対立が生じることになった。つまり「民族共同体」をめぐっては、統合と分散という相反する2つの力が働いていたのであり、それゆえ利害・動機が多様性から生ずる著しく競合的な政治が、「民族共同体」の一体性という語法のもとでおこなわれることになった。だが重要なのは、「民族共同体」をどう表象すべきかをめぐっては党内でも対立があり、国民世論も分裂していたにもかかわらず、「民族共同体」の理念そのものは大半の人々に共有され、暗黙のうちに受け入れられていたことである。いいかえれば、「民族共同体」の表象をめぐるとの対立はこの曖昧な理念の上でたたかわされ、この理念そのものに対立することはなかったのであり、それどころか、たがいに対立するあらゆる表象がこの理念に根を下ろしていたのである。これによって人々に共有されていた「民族共同体」の理念は自明なものとなり、曖昧さを保ちながらもリアリティをおびてたちあられるにいたった。それは一切の批判を超越し、一切の思考を停止させる危険性をはらむものでもあった。多様に表象されながらも自明性をおびてたちあられた「民族共同体」は、共同体をもとめる集合的な想像力が生みだしたものであり、この「想像の共同体」[アンダーソン 1987]が第三帝国という矛盾にみちた体制をつなぎとめていたのである。

1939年9月に予定されていた「平和の党大会」は戦争の勃発によって中止され、第三帝国の崩壊までついに党大会が開催されることはなかった。だがすでに党大会の魅力は薄れ、辛く退屈な行事として知られるようになり、娯楽による客寄せも限界に達していた。そもそもナチ政権が安定期を迎えた30年代半ば以降、党大会のような大衆運動の政治的意義は低下し、内政よりも外交政策に没頭するようになったヒトラーは、しだいに国民の前から遠ざかるようになっていた。1939年の開戦以降、国民の忠誠心を維持するためにますます娯楽や気晴らしが重視されることになるが、もはや党大会



のごとき行事の幕はなかった。戦争という現実はこれとは別の動員を要求したのである。

## 史料

党大会の公式報告

*Nürnberg 1933. Eine Sammlung der wichtigen Reden auf dem Parteitag der Nationalsozialistischen Deutschen Arbeiterpartei vom 30. August bis 3. September 1933, Berlin.*

*Der Kongreß zu Nürnberg vom 5. bis 10. September 1934. Offizieller Bericht über den Verlauf des Reichsparteitages mit sämtlichen Reden, München.*

*Der Parteitag der Freiheit vom 10. bis 16. September 1935. Offizieller Bericht über den Verlauf des Reichsparteitages mit sämtlichen Kongreßreden, München.*

*Der Parteitag der Ehre vom 8. bis 14. September 1936. Offizieller Bericht über den Verlauf des Reichsparteitages mit sämtlichen Kongreßreden, München.*

*Der Parteitag der Arbeit vom 6. bis 13. September 1937. Offizieller Bericht über den Verlauf des Reichsparteitages mit sämtlichen Kongreßreden, München.*

*Der Parteitag Großdeutschland vom 5. bis 12. September 1938. Offizieller Bericht über den Verlauf des Reichsparteitages mit sämtlichen Kongreßreden, München.*

他の史料

Behnken, Klaus (Hrsg.), 1980 *Deutschland-Berichte der sozialdemokratischen Partei Deutschlands (SOPADE) 1934-1940*, 7Bde, Frankfurt/M.

Boberach, Heinz (Hrsg.), 1984 *Meldungen aus dem Reich 1938-1945. Die geheimen Lageberichte des Sicherheitsdienstes der SS*, 17Bde, Herrsching.

Der Reichsorganisationsleiter der NSDAP. (Hrsg.), 1936 *Organisationsbuch der NSDAP.*, München.

Domarus, Max (Hrsg.), 1973 *Hitler. Reden und Proklamationen 1932-1945. Kommentiert von einem deutschen Zeitgenossen*, 4Bde, München.

ヒトラー, アドルフ, 1973 『わが闘争(上・下)』(平野一郎・将積茂訳)角川書店。

Michalka, Wolfgang (Hrsg.), 1993 *Deutsche Geschichte 1933-1945. Dokumente zur Innen- und Außenpolitik*, Frankfurt/M.

## 文 献

- アンダーソン, ベネディクト, 1987 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行——』  
(白石隆・白石さや訳) リプロポート。
- ベンヤミン, ヴァルター, 1981 「パリ書簡」(針生一郎訳)『ベンヤミン著作集8』晶文社。
- Bollmus, Reinhard, 1970 *Das Amt Rosenberg und seine Gegner. Studien zum Machtkampf im nationalsozialistischen Herrschaftssystem*, Stuttgart.
- Broszat, Martin, 1970 “Soziale Motivation und Führer-Bindung des Nationalsozialismus”, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 18.
- Buchholz, Wolfhard, 1976 *Die nationalsozialistische Gemeinschaft “Kraft durch Freude”. Freizeitgestaltung und Arbeiterschaft im Dritten Reich*, München.
- Burden, Hamilton, 1967 *Die Programmierte Nation. Die Nürnberger Reichsparteitage*, Gütersloh.
- フェスト, ヨアヒム, 1975 『ヒトラー(上・下)』(赤羽龍夫・関楠生・永井清彦・佐瀬昌盛訳)河出書房新社。
- フォッケ, ハラルト/ライマー, ウーヴェ, 1984 『ヒトラー政権下の日常生活——ナチスは市民をどう変えたか——』(山本尤・鈴木直訳)社会思想社。
- フライ, ノルベルト, 1994 『総統国家——ナチスの支配 1933-1945年——』(芝健介訳)岩波書店。
- ギアツ, クリフォード, 1991 『ローカル・ノレッジ——解釈人類学論集——』(梶原景昭・小泉潤二・山下晋司・山下淑美訳)岩波書店。
- グルンベルガー, リヒャルト, 2000 『第三帝国の社会史』(池内光久訳)彩流社。
- Hüttenberger, Peter, 1976 “Nationalsozialistische Polykratie”, in: *Geschichte und Gesellschaft* 2. ———, 1981 “Interessenvertretung und Lobbyismus im Dritten Reich”, in: Hirschfeld, Gerhard/Kettenacker, Lothar (Hrsg.), *Der “Führerstaat”: Mythos und Realität. Studien zur Struktur und Politik des Dritten Reiches*, Stuttgart.
- ケンポウスキ, ヴァルター, 1973 『君はヒトラーを見たか』(到津十三男訳)サイマル出版会。
- Mason, Timothy, 1981 “Intention and Explanation: A Current Controversy about the Interpretation of National Socialism”, in: Hirschfeld, Gerhard/Kettenacker, Lothar (Hrsg.), *Der “Führerstaat”: Mythos und Realität. Studien zur Struktur und Politik des Dritten Reiches*, Stuttgart.
- 宮田光雄, 1991 『ナチ・ドイツの精神構造』岩波書店。
- Mommsen, Hans, 1971 “Nationalsozialismus”, in: Kernig, Claus Dieter (Hrsg.), *Sowjetsystem und demokratische Gesellschaft*, Bd.4, Freiburg.
- モッセ, ジョージ・L, 1994 『大衆の国民化——ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化——』(佐藤卓己・佐藤八寿子訳)柏書房。

- Petsch, Joachim, 1994 *Kunst im Dritten Reich. Architektur-Plastik-Malerei-Alltagsästhetik*, Köln. ポイカート, デートレフ, 1991 『ナチス・ドイツ——ある近代の社会史——』(木村靖二・山本秀行訳) 三元社。
- , 1993 『ワイマル共和国——古典的近代の危機——』(小野清美・田村栄子・原田一美訳) 名古屋大学出版会。
- Rossmessl, Dieter, 1985 “*Ganz Deutschland wird zum Führer halten...*”. *Zur politischen Erziehung in den Schulen des Drittes Reiches*, Frankfurt/M.
- シェーンボウム, デイヴィッド, 1978 『ヒットラーの社会革命——1933~39年のナチ・ドイツにおける階級とステイタス——』(大島通義・大島かおり訳) 而立書房。
- スローターダイク, ペーター, 2001 『大衆の侮蔑』(仲正昌樹訳) 御茶の水書房。
- シュペーア, アルベルト, 1970 『ナチス狂気の内幕——シュペーアの回想録——』(品田豊治訳) 読売新聞社。
- Stahr, Gerhard, 2001 *Volksgemeinschaft vor der Leinwand? Der nationalsozialistische Film und sein Publikum*, Berlin.
- Stollmann, Rainer, 1976 “Faschistische Politik als Gesamtkunstwerk”, in: Denkler, Horst/Prümm, Karl (Hrsg.), *Die deutsche Literatur im Dritten Reich*, Stuttgart.
- 田野大輔, 1995 「ポリクラシーの政治力学——ナチ支配の解釈をめぐって——」『京都社会学年報』第3号。
- テーヴェライト, クラウス, 1999 『男たちの妄想 I ——女・流れ・身体・歴史——』(田村和彦訳) 法政大学出版局。
- Voges, Michael, 1981 “Klassenkampf in der Betriebsgemeinschaft”, in: *Archiv für Sozialgeschichte* 21.
- フォンドウンク, クラウス, 1988 『ナチズムと祝祭——国家社会主義のイデオロギー的祭儀と政治的宗教——』(池田昭訳) 未来社。
- Zelnhefer, Siegfried, 1991 *Die Reichsparteitage der NSDAP. Geschichte, Struktur und Bedeutung der größten Propagandafeste im nationalsozialistischen Feiertag*, Nürnberg.